

引きこもり勇者のために 美少女パーティーが 一肌脱ぐようです

酒井仁
挿絵／ここあ



立ち読み版

Flora Flostep

フロウラ・ フローステップ

聖王教会で稀代の術者と称され
る女僧侶。あとけない容姿に
反して策士なエロ嬢。



Ernest O'Brien

アーネスト・ オブライエン

ある日突然、勇者の力を受け継
いでしまったものの自覚もな
く、楽隠居生活を送る
青年。



Nastassja des rois
Gattienatia

ナスターシア・デ・ロワ・ ガトゥルナティア

高位魔族の令嬢で、魔王の力
に目覚めて以来、この世に
君臨しようと努力して
いる。



CHARACTERS

Elizabeth Forvalt

エリザベス・
フォーバルト

王国の戦士団から派遣された女
戦士。生真面目で色恋沙汰
は苦手、奥手で処女。



Pamela Mela
Pamelight

パメラ・メラ・
パメライト

魔法ギルド所属の女魔法使い。
年上の色香で積極的12エッ
チな誘惑を仕掛けて
くる。



「ああ、エリザベスさんの涎よだれ、あつたかいです」

「は、恥ずかしいことを言うなッ。えい、まだ出ないのか、この、このッ」

一般成人男性のサイズに比べると、アーネストのイチモツはなかなか立派なサイズをしているが、エリザベスにはそんなことわかうはずもない。ただ、片手に余る肉竿を体全体を揺るようにしごき立てる。

するとポリウムたつぷりの肉球がゆさゆさと揺れ、アーネストはごくりと生唾を飲み込まずにはいられない。ふらふらと灯りに誘われる蛾のように手を伸ばすと、両手にむんずと乳房を掴み上げる。

「あふんっ。わ、私の乳房を触りたいのか？」

「だ、だって、生のおっぱいなんて触るの初めてで……ああ、乳首がコリコリしてて、こ、これってエリザベスさんも感じてるんですか？」

「し、知るかそんなことッ。あん、んふうんっ」

恥ずかしいのに、勝手に声が漏れてしまう。

確かに肉球の中心の突起は硬く充血し、そこをつままれると「びりりっ」と電気のような快感が走るのだ。

「おっぱいがぼよぼよして気持ちいい……いい、痛くないですか」

無我夢中でむしゃぶりついていた時に比べると、青年はずいぶん落ち着いた様子で、む

しろソフトタッチで女騎士の肉球をやわやわと揉み上げる。

「うむ、も、もう少し、強く揉んでも大丈夫だ。んんっ、ち、乳首は特に……気持ちいいかも、あふんっ」

乳房を揉ませながら勃起ペニスをしごく女騎士の顔が赤い。

今日会ったばかりの、しかも勇者に乳を揉まれて感じている自分が恥ずかしくてたまらない。その勇者の男根をしごいて、精を絞り取ろうと必死な自分は、さらに恥ずかしいのだが、いまさら止めるわけにもいかない。

（殿方の……これはなんと熱く脈打っているのだ……太い血管が幾筋も走っていて、勇者の鼓動すら感じる。ああ、この男は私の乳房を揉んで興奮しているのだ）

まだ、自分のような無骨な女が男を興奮させているという実感は湧かない。いや、意識するほどに心がくすぐられていくようでむず痒い。

（アーネストどのは、私のようながさつな女が相手でも、交尾を……男女のまぐわいをしたいと思うのだろうか）

異性から直接的な欲望を向けられるのは、それほどいやではなかった。むしろ目をらんらんと輝かせ、乙女の乳房を凝視する青年の熱視線を感じると、胸の奥が熱くなるような気すらしてくる。

（いや、胸だけじゃない……下腹の奥がむずむずするというか、まさか、私もアーネスト

どのに触られて興奮しているとも言うのか)

「はあ、はあ、エリザベス、さんつ。き、気持ちいいですつ」

むにむにと肉球を揉みしだきながら、アーネストは腰をふるふる震わせる。唾液の効果でスムーズにしているのがよかったようだ。

「そ、そうか。どうだ、男の、ナニは出そうなのか」

「いえ、それはまだちよつと」

青年の困り顔に、エリザベスもどうしていいかわからない。どうやら男根をしごくというやり方自体は間違っていないようだが、自分にはないモノでどうやって快楽を得ればいいのか、見当もつかない。

(もしかして、実際にまぐわわないと駄目ということなのか？ し、しかしいくらなんでもそれは……)

交尾が子孫を作る行為だということは知っている。エリザベスが勇者とまぐわうということは、女騎士が勇者の子どもを身ごもってしまうということだ。

(私には魔王と戦うまで勇者を護衛するという大任がある！ その任を投げ出すわけにはいかぬし、それに)

ちら、とアーネストの顔を窺うと、青年は騎士の逡巡にも気付いていない様子で、一心に乳房を揉みしだいている。

そう言つて腰のベルトに手を掛ける騎士を見て、アーネストは「おぶぶぶぶ」と意味不明な声をあげながらエリザベスを止めようとする。

「ただただ駄目です、駄目ですよエリザベスさん。僕みたいな、今日会つたばかりの男に処女を捧げるだなんて！」

「だが、手でしごくだけでは埒があきそうもない。やはり実際にまぐわうしか」

「ちよつと待つて待つて待つて！ そりゃ、エリザベスさんみたいな綺麗な人と初体験できたら僕も嬉しいですけど、他にも方法はありますって」

綺麗な人、という部分に女騎士はぴくりと反応する。

「貴殿はまた調子のいいことを……女性経験がないというのは本当だろうな！ それで、その方法とはなんだ」

エリザベスの言葉に、青年は両手を乳房から離すといいにくそうに目を逸らす。

「ぼぼ僕も、実際にしてもらつたことはないんです、知識として知っただけというか」

「いいから話せ、もどかしい」

「ええと……エリザベスさんの、その大きなおっぱいですね、僕のを挟んで胸で刺激するんです」

恥ずかしそうに説明するアーネストに騎士はうむうむと頷いていたが、やがて頭から湯気を噴き出しそうなほど赤面する。

「むっ！ む、む、胸でッ？ 勇者殿の、その、腫れあがったそれを挟んでしごくというのか、胸で？ 貴様、私を謀るつもりではないだろうな！」

「ひえええつ、嘘じゃないです、そういう奉仕テクニクもあると物の本に」

「何の本だ、なんの！ 貴殿はそのような公序良俗を壊乱する書物を買ひ漁る趣味があるのか、変態か！ この変態勇者！」

「スミマセン、スミマセン！ や、やっぱり僕一人でなんとかしますから」

しかし、青年の股間のナニははち切れんばかりに膨張し、息はさつきより荒くなっている。女騎士が下手に刺激したおかげで、かえって興奮が増しているのだ。

（むう……アーネストどのは勇者とはいえ、年頃の殿方。そういう方面に明るくない私よりは、淫らな分野にも通じているようだ。ならば、ここはやはり彼の言う通り……）

エリザベスは意を決すると、両手で乳房を持ち上げるようにした。

「え、エリザベスさん？」

（まずは、潤滑油代わりの涎を）

乳の谷間にとろりと唾液を垂らし落とすと、ずりずりと体を下に移動させていく。

そして豊満な肉球を左右に押し広げるようにすると、上半身を倒して青年のイチモツをばふりと挟み込んだ。

「くっ、あ、熱い」

手に握った時よりも陰茎の熱がダイレクトに伝わってくるようだ。

房の間に乙女の涎がにちゃにちゃと濡れた音を立て、青年のモノはすっぱりと女騎士の乳の間に飲み込まれてしまう。

「う、うあああ……ッ。エリザベスさんのおっぱいに、僕のが挟まれて」

「解説をするな、解説を！ これで、乳房を上下に揺すればいいのか……？」

手に余るほどのポリウムを持った肉球がゆさゆさと揺れ、みりりと勃起した肉竿を擦りあげる。四方から包み込んでくる乳の弾力と絶妙な肉圧に、アーネストはぎりつと歯を食いしばって快感を堪える。

「くっ、え、エリザベスさん……気持ち、いい、です……ッ」

真っ白い肉球の間から「にゅるんっ」と赤黒い先端が顔を覗かせ、また乳の間に消えていく。人肌で温められた自身の唾液の匂いに潮のような香りが混じっているのは、肉棒の先端にジワリと滲んだ透明な体液の香りだろうか。

（これは……ただの変態行為かと思っていたが、違うようだ）

乳房で青年を責め立てる女騎士は、己の行為の意味にようやく気付いた。

（これは、女の乳を性器に見立てた疑似交尾行為なのだ。なるほどこれなら勇者殿の子どもを孕む危険もないだろうが、しかし……）

青年にのしかかって乳房で陰茎をしごく自分の姿に、頬の火照りが止まらない。

肌を押し付けられた陰茎の熱さ、硬さ、それにどんだん強くなってくる独特の臭気。金属のようにてかり輝く先端部には爪で刻んだような口があり、ここから赤子の素が放出されるのだろうかと思われた。

(勇者殿の……殿方の赤子の素……いつたいどのようなものなのだろう)

馬の交尾を見た経験はあっても、牡が出すという子ども素を見たわけではない。羞恥心半分、好奇心半分で胸を揺すっていると、青年の腰がびく、びくと痙攣するように何度も浮き上がる。

「うあああつ、ボクツ、も、もう、出そう……っ」

「うふうっ？ ちょ、先端が口に、んんん、んむううっ？」

膝の屈伸を利用して腰を突き上げる勢いのままに、亀頭は乳から飛び出して乙女の唇にねじ込まれた。

ぱんぱんに張りきった先端に目を白黒させ、えずきながら亀頭に舌を絡めると、苦いよくなしよっぱいような奇妙な味が口の中に広がる。

「あああつ、エリザベスさんの口の中、ぬるぬるしてるうッッ」

「んぶ、ふむううっ！ ぶあ、ぶはあうっ。アーネスト、お、おちつ……ッッ？」

ずるるっ、と口から引き抜かれると同時に、青年の茎が跳ね上がった。

びゅくんっつ、びゆるびゆるっ、びゅばあ〜っつつ。

粘度の高い白い液体が宙を舞い、女騎士の端正な顔一面にまき散らされる。

滑らかな乙女に肌にべちゃりと張りついたそれは流れ落ちることなく、むつとむせ返るような臭気と熱でエリザベスを包み込む。

「うううっ、あ、あうううっ。と、止まらないくっっ」

「ふああっ、あ、熱いッ、それにすごい匂い……ッ……」

放出はなおも続き、騎士の黒髪や騎士服までも汚していく。その量と匂い、生まれて初めて見る男性の子種汁に黒髪の女騎士は圧倒され、言葉を失う。

(こ、これが、殿方の赤子の素……)

唇にドロリと垂れてきたそれを無意識に舐め取ると、濃厚な味に頭がくらくらとする。

決して美味しいとは思わないが、まずい、気持ち悪いというだけでは片付けられない不思議な気分になる。それは「オス」の持つ生命力とでも言うのだろうか、正直男っぽくないアーネストであっても、やはり自分とは違う「男」なのだたと強く感じさせられる。

「す、すごい……なんて匂いと量、それにべとべとして……」

「はあ、はあ、はあ……え、エリザベスさん」

青年の声にハッと顔をあげると、目の前の茎はこれだけ大量に射精したにもかかわらず、まだ隆々とそびえたっている。

青年はもどかしげに自分の下腹部を見つめ、明らかに期待を込めた目で女騎士に熱い眼



央の突起物に押し当て、念を込めた。

「あきやああつ、そ、それも振動、して……ッ！ あつ、あ、はああんっ」

「駄目よ、両手を・あげては」

くっ、と赤毛の魔法使いは不可視の力に縛られたように両腕をだらりと下げる。フロウラは無防備な両方の乳首にカプセルを交互に押し当て、空いた方の突起を口に含んで「ぴちやぴちや」とねぶり始めた。

「んふうん、この香水大人っぽい……教会じゃこんなものつけるのはご法度だったから羨ましい……」

「んっ、くううっ！ や、あ……舌で、転がさないでええっ」

乳房を責め立てる間も、眼鏡の少女は股間をぐりぐりとパメラの股に押し当てて、振動下着で花弁を刺激する。

為す術もなく責められる一方の魔法使いと、責める一方の女僧侶の絡み合うさまを、アーネストもまた「言の葉のちから」とやらに拘束されて見ていることしかできず、ただ思いを募らせる。

ただし——その思いは、どうにかこの状況を打開しなければということではない。

（うわああ……女の子同士の絡みあってやっぱりエッチだなあ。パメラさんの魔法でエリザベスさんが拘束されてた時もドキドキものだったけど、この二人も……特に、あのパメラ

さんが責められる一方というのが)

などと、目の前の桃色遊戯にすっかり見とれてしまっている。

「んっ、むちゅっ……パメラちゃんの乳首こりこりになってきたわよ。ここもなんだかくっしよりに濡れちゃってるし」

片手を魔法使いの股間に差し込んで指を蠢かすと、「ちゅっ、くちゅっ」と湿った音がアーネストのところにもまで響いてくる。

「はう……はうう……」

抵抗もできずに責められる赤毛の美女は目も虚ろで、時折しゃっくりのような声を漏らすばかり。切れ長の目尻に涙の粒が浮かんでいることに気付き、アーネストはさすがに彼女の身を案じる。

「あの、フロウラ。も、もうその辺でやめてあげたらどうか」

「馬鹿言わないで、本番はこれからなんだから。いいから、勇者ちゃんも・準備・して」
「ほ……ん、ばん……?」

無意識に繰り返し返したパメラの目が極限まで開かれる。その視線が自分に向けられていると気付き、アーネストはなんとなく自分の体を見下ろし——絶句した。

「うわああああっ、ぼ、僕はいったい何をッ?」

なんと、青年の手が本人の意思とは無関係にズボンのベルトを緩め、下着ごとズボンを

引き下ろそうとしていたのだ。

いくら念じても自分の手を抑えられず、ついにイチモツが露出される。美少女二人の痴態を目の当たりにしていたため、外に引き出されたそれはたちまちむくむくと膨張し、逞しく天を仰ぐ。

「ほおら、あんたもやる気満々じゃないの。さ、パメラちゃん」

「い、いや……」

「ふふふ、『言の葉のちから』には逆らえないって言ったでしょう。パメラ・立って・彼のところに・行くのよ。あの勃起ちんぽで処女膜をぶち抜いてもらいましょう」

「あ、あ……」

しかし、聖職者の神秘の力に魔法使いの体は従ってしまう。

椅子から腰をあげ、ぎこちない動きながらも一歩ずつ、確実にアーネストに近づいてくる。その顔は自分の意思と無関係に処女を失ってしまう恐怖に怯えている。

「やめろ、フロウラ！ そんな、人の意志を無視するような力を振るっちゃいけない！」

だがいくら抗議しても、アーネスト自身少女僧侶の言葉に逆らえない。

（くそっ、動け、動けよ僕の体！ 僕は魔王さえ倒す勇者なんだろ！ 勇者が、女の子を泣かせるようなこと、しちゃいけない……いけないんだ！）

しかし、冷や汗が噴き出るほど歯を食いしばっても、体はびくりとも動かない。こうい

う状況にもかかわらず、隆々と天を仰いで勃起している浅ましいイチモツが、いまは憎くてたまらない。

「いやあ……こんな初体験はいややお。おちんちん怖いよお……」

「なに言ってるの、エリザベスちゃんと勇者ちゃんのエッチ見てたでしょ。二人ともすぐく気持ちよさそうだったし、パメラちゃんもすぐにああなるって。女の純潔なんてどうせ遅かれ早かれ失うんだし、女は度胸！」

他人事と思つてフロウラは無責任に囁し立てる。その間にも赤毛の魔法使いは乳房と股間を露出したままアーネストの前まで来ると、くるりと背中を向けてしまう。

（うう、ミニスカートの裾からパメラさんのお尻が……あああつ、僕の上に腰を落とすつもりなのか？）

初めての性行為に怯え泣きじゃくつても、パメラの体はフロウラの「言の葉」に支配され、自ら望まぬ行為を続行する。もう少し腰を下ろせば、パメラの処女穴は男根を飲み込んでしまうだろう——彼女の意志とは無関係に。

「やめろ……フロウラ、今すぐ……やめろおおおおおつつ」

「だ〜から無駄無駄……えっ？」

怒りと共に体の奥から凄まじい力が漲ってくる。

それはアーネストの手足の先まで充満すると、体を縛っていた不可視の力が蜘蛛の巣を

ちぎるように散り散りにちぎれ飛ぶのを確かに感じた。

「そんな、あ、ありえないわこんなこと！ こ、このあたしの『言の葉』を力ずくで引きちぎるなんて!!」

「うおおおおおおおおおおおおおくくくくくくくくッッッ！」

フロウラのかけた束縛を、アーネストは見事にはねのけた。

自由を得た青年は、胸の奥からこみ上げるエネルギーに突き動かされるようにガタリとソファから立ち上がった——勃起ペニスと魔法使いのヴァギナが触れる寸前だったにもかかわらず。

ぬぶううううううつつつ。

「んひいんっ!」

・ ・ ・ ・ ・

「え」

そう、赤毛の魔法使いがいまにも青年の茎の真上に腰を下ろそうとしていたところに思いきり立ち上がったものだから、アーネストの肉棒は一気にパメラの花弁を貫いてしまったのだ。

「うわあああああ、ぼつ、僕はなんてことを……」

自分のしでかしてしまったことに気付き、アーネストは完全に混乱していた。

とにかく早く引き抜かなければ、と焦って逆にパメラの腰をぐいと抱き寄せると、魔法使いの口からは「ああんっ」と甘ったるい声が漏れた。

「パ、パメラさん？ うわわっ、あ、熱いお湯みたいなのがツツ」

「お、ちんぼしゅごいいい……お、お腹の奥まで届いてるうっつ」

肩越しに振り返った赤毛美女の顔に、苦痛の色は欠片もなかった。

それどころか涙を浮かべていた瞳はうっつとりと潤み、半開きの口からだらしなく突き出た舌が恐ろしく艶めかしい。そして、挿入の衝撃でたぶたぶと揺れる乳房のポリウム感
は水袋のようで、エリザベスの張りのある巨乳とはまた違う色気だ。

「パ、パメラさん綺麗だ……」

ドキリとした拍子に腔の中で肉棒が跳ね上がり、パメラは「ふひゃん！」とまた甘い嬌
声をこぼす。

「うああ、おま○この奥がとろとろで……パメラさん、う、動かないで」

「そんなこと言われてもッ、あはっ、おま○こじんじんして気持ちいいっ。セックス気持
ちいいれすうっつ」

夢見るようにそう答えて後ろ手に伸ばしてくる手を、青年は掴んでやる。

すると魔法使いは自分から腰を左右に振り、より深く青年の茎を飲み込もうとしてく
るのだ。蜜液たっぷりな女肉がきゅっつと肉竿を四方八方から締め付けてきて、それでい

て適度な弾力があるのが素晴らしい快感をもたらす。

「ううっ、エリザベスさんのきつきつま〇ことは一味違う、この包容力は……ッ」

「あふうん、勇者さまの、勇者ちんぽが子宮にまで届いてるのお〜ッ」

膝の上に乗られているのでそれほど思いきつては動けない。だがその分、赤毛の魔法使いが淫らに腰をくねらせ、アーネストはされるがままにイチモツを乙女の処女穴でこすり、しごかれ、快美のうめき声を漏らす。

「なによお、『言の葉』を振りきつても、やることはやるんじゃない」

眼鏡の僧侶はふうと頬を膨らませるが、甘い声でよがる女魔法使いを見て、まんざらでもない顔をする。

「ど〜お、パメラちゃん？ おま〇ここにちんぽぶち込まれた感想は」

「きもひいい、おちんぽ気持ちいいッ。勇者さまあ、もつとパメラのおま〇こずぶずぶしくてくらさい〜ッ」

さつきまで処女を失うことを恐れていたとは思えないようなエロ顔で、パメラは淫らに腰をくねらせてアーネストにおねだりしてくる。

「は、はいっ」

最初、いかにも経験豊富な大人のおね〜さんとしてアーネストやエリザベスを翻弄してきた女魔法使いパメラ。だが、彼女はいかにも男慣れしているというふうに装っていただ

けの処女だった。

それが露呈され、フロウラの力によって半ば強制的にアーネストと初体験させられそうになり、アーネストはそれを阻止しようとして逆に自らパメラの処女を奪ってしまった……考えるほどに頭が混乱し、それでいてペニスから伝わるぬるぬるの腔肉の感触に酔いしれそうになる。

「ふあああ勇者さまあ。もつとお、もつとおま〇こぐちゆぐちゆかき回してくらさいっ」
「ええい、もうヤケクソだあ~~~~っつっ」

少なくともいまのパメラは自分に犯されることを嫌がってはいない。

アーネストは考えることを放棄し、本能の赴くままにパメラの乳房を背後から掴み上げると、下腹部を力強く突き出した。

ずぶつ、ぬぶぶぶつ。

たつぷりの愛液をたたえた肉穴を突き進み、亀頭が勢いよく子宮の入り口に激突する。パメラは「ひやふんっ」としゃっくりのような声で喘いで身を震わせるが、それが愉悅に よるものなのではや明らか。

「うあああ、すごい、おっぱいふかふかだ……い、い、行きますよパメラさん~~~~っ」
「あひ、はひやううんっ。おっ、おにゃか突き上げられるうっ、おちんぼが、ま〇この奥ノックしてますうっ」

ピストンの勢いで前につんのめりそうになる魔法使いの体を、小柄な少女が支え、その唇を奪う。突き出された舌に自分の舌を絡め、濃厚なベーズをかわす美少女たちに、アーネストの興奮もいや増す他ない。

「うおおおつ、パメラさんのふかふかおっぱいっ、とろとろおま○こっ、しっ、子宮の奥までっ、ぶち抜く……っ」

「んふう、れろ、むちゅ……ふわあああつ、ま○こ壊れひやうつ、んむうううっ」

「あはあんっ、いいわパメラちゃん、さいっこのスケベ顔よおっ。あたしもま○こがじんじんしちゃう……ほら、勇者ちゃんもつと気合い入れて腰振って！」

「うおおおおっ……っ」

ぐちゅぐちゅ、じゅぶじゅぶ、にゅっ、ねちよっ。

肉棒と粘膜のこすれ合う音、汁の飛び散る音、そして舌と舌が絡み合う淫らな音が室内に響き渡り、一人の男と二人の美少女は肉欲のままに快楽を貪り続ける。

（す、すごい締め付けだ……エリザベスさんのぷりぷりの肉と違って、まるでま○こが吸い付いてくるみたいだ！ くっ、けどまだまだ……っ）

「んふああああ、おちんぼしゅごいのお、お、おま○こっ、ちんぼでずこずこされて、頭おかひくなっちゃうっ……っ」

こみ上げる射精感をかろうじて堪えながら、アーネストはなおも腰を振り立て、乙女の



に熱くなつて勃起が収まらなくなつてしまつたのだ。

(だとしたら、ナスターシアさんの体はいま……)

魔王と言つてもエリザベスたちに勝るとも劣らぬ可憐な美少女、そんな少女が体を火照らせているとなると、アーネストも反応せずにはいられない。ましてやアーネスト自身も勇者の力を発動させているのだ。

「はあ、はあ、はあ……どうしてしまつたのだ、我の体は？　む、勇者？」

傍らにうづくまつて前屈みになつているアーネスト青年に、女魔王もうろたえた声をあげる。

「ナ、ナスターシア、さん。これはちよつと、ま、まずいかもしれません」

「どういふことだ勇者!？」

「……………」

ナスターシアはどうやら己の変調がどういふものなのか気付いていないらしい。

だがアーネストの口から説明するのも憚られ、そうこうしているうちに股間のイチモツは痛いほどに張りつめてくる。

「ええと、ナスターシアさん。さつき僕とエリザベスさんたちの……その、夜にナニをしいたか知っていると」

「あ、ああ。まつたく勇者にあるまじき破廉恥な、そ、それがどうしたのだ」

「ナスターシアさんは、ああいう経験はしたことが……ぶべっ」
いきなりエロトークを仕掛ける勇者の鼻面に、魔王の鉄拳が突き刺さる。

「その反応は、な、ないんですね」

「あ、あるわけないだろうがっ、我を誰だと思っておるッ」

顔を真っ赤にしてぷりぷり怒る茶髪の美少女に、アーネストはしどろもどろになりつつも、いま彼女の体起こっている変調がどういう類のものなのかをどうにか説明する。

（あああああつ、僕は、年頃の娘さん相手になんてこんな恥ずかしい説明をしてるんだッ。これじゃ酒場で女の子に絡むエロオヤジじゃないかあああつ）

徐々に理解するうちに端正な顔を茹で蛸のように真っ赤に染めていくナスターシア。その気まずさたるや、再び勇者の力を発動させて異空間に逃げ込みたくなるほどだ。

「な、なるほど……つまり、その、私の肉体は、なんだ、男とのそういう、ナニな行為を欲して火照っているのだと」

「だと、思います。恥ずかしながら、僕も同じような状況になってますから」

前屈みになって股間を押さえるアーネストを、さも汚^{けが}らしいモノのように見つめる美少女に、なんとも居たたまれない。

「少なくとも、この状態が続く限り魔王の力は発動できぬようだ。ということは、この空間を脱することもできぬということ」

「はい」

「ところで勇者……貴様、我を無理やり手籠めにしようとは思わなかったのか」
ぶっ、といきなりの発言にアーネストは咳き込む。

「貴様ももう理解しているはずだ。いま我らは共に力を封じられている。つまり身一つであれば我は貴様より力も弱く体力もない。貴様が力づくで迫ってきたら、為す術もなく陵辱されるは必至」

「いや、ちよつと」

「あのはしたなくピンピンに反り返った牡のイチモツで我の処女膜を引き裂き、あたら若き魔王の純潔を踏みにじり、我に恥辱の限りを尽くすこともできるのだぞ。それともあれか、我の外見が好みではないのか」

毎夜の覗き見で得た知識なのか、ナスターシアは赤面しつつ大胆に挑発してくる。

「まあ確かにあの女騎士より少しばかり胸は小さいが、スタイルにはそこそこ自信があるぞ。それとも魔族の女というだけで萎えてしまうか、勇者？」

女魔王の迫力に尻もちをついたアーネストの目の前で、ナスターシアは胸を突き出す。

なるほどサイズは劣るが流れるようなボディラインは美しいの一言で、整った顔立ちも生意気そうな口調も十二分に男心をそそる。

「男はみなそうだ、自分の都合だけで女を娶り、犯し、快楽を貪り、子を産ませる。女も

また自分と同じ存在なのだとということをもるで理解しておらぬ」

「ナスターシア、さん……?」

茶色のロングヘアが揺れ、少女の潤んだ瞳が迫ってくる。

「貴様は先刻こう申した、自分だけ気持ちよくなるうとは思っていないと。それを証明できるか?」

「ナ、ナスターシアさん、それって……」

魔王の力を使った副作用は、体の変調だけでなく女魔王の精神にも影響を与えているのだろうか。これではまるで「自分をまぐわえ」と誘っているようではないか。

「魔族の女は己がどういう生き方しか選択できないか、幼い頃から教えられる。より強い魔族の男に嫁ぎ、その子種で孕まされることこそ女の幸せだと。女として愛され、妻として労いたわられることなど最初から期待してはいけないのだ」

やはり魔族には人間と違った価値観があるようだ。だが女として生まれただけで男に犯され、子を産むだけの生き方はあまりにも寂しいと青年は思う。

「我がその頸木くびきから解き放たれたのは、魔王に選ばれたからだ。だがいまはその力も使えぬ。勇者、いやアーネスト。お前は無様にも発情し、肌を火照らせた我を悦ばせることができるか……?」

目の前の少女は魔王かもしれない。

だがそれ以上に孤独を抱えた一人の儂げな少女なのだとアーネストは感じた。言葉ではうまく説明できない、そう思った青年はナスターシアに顔を近づけていく。

「ゆうしゃ——」

「ナスターシアさん……」

唇が重なり、勇者は魔王の肢体を強く抱きしめた。

「んっ、ちゅ……ぶは……」

不可思議な白い異空間の中で、勇者の運命を担われた青年と魔王の運命を受け継いだ少女は抱き合って舌を絡めている。

少女はまだ接吻自体に慣れていない様子で、アーネストが差し込んだ舌を震えた様子で受け入れ、ぴちゃぴちゃときこちなく自分の舌を絡めて変な顔をした。

「舌を絡めるというのは、不思議な感覚だな。だが、悪くはない」

舌先で少女の口中をなぞるようにくすぐると、ナスターシアはふるると身を震わせるが、嫌がっている様子はない。

いやむしろ自分からアーネストにしがみつくように身を預けてくる。しかしこれは青年に心を許しているというわけではない。力を使った反動で生じた体の火照りを解消しようとしているのだ。

(とりあえず、怖がらせちゃいけない。彼女はいま、見た目通りの女の子なんだから) そつと唇を離すと唾液の糸が伝う。

腕の中に抱きとめるように背中に手を回し、ロングドレスの背中を幼児をあやすように撫でてやると、少女は「ほう……」と安心したような吐息を漏らす。

「男というのは、そういう優しい抱きしめ方もできるのだな。まるで母様のようなだ」

「ああ、それわかりますよ。母親の記憶ってそういう感じですよね」

「……………」

口を滑らせた、というふうになスターシアは口をつぐみ、肩口に顔を押し付ける。母親のことには触れない方がいいらしい。アーネストは艶やかな少女の髪を撫でる。さらさらした感触が実に心地よい。

「ん、髪以外のところも、もっと触ってもいいぞ」

無論青年に否やはない。首筋に押し当てた唇をゆつくりとずらし、白くて細い少女の首筋を舐めあげると、あの甘いフェロモン臭がふわりと香る。

「ふああ、く、くすぐったいではないか。あ、あふんっ」

ケープ状になった部分に顔を潜らせると、少女の甘い香りが何十倍にもなって押し寄せてくる。牡の本能を直撃するその香りを胸一杯に吸い込むと、ドレスの上から胸の膨らみに頬ずりをする。

「エリザベスとかいう女に比べると大した胸では……あひゃんっ、こ、腰を撫でるなっ」
「……いやですか？」

「い、いやではないが、なにか体のあちこちが敏感になっているのだ。もう少しゆっくりと……くふううんっ」

たとえばフロウラは小柄な分、胸やヒップの膨らみが逆に目立つが、ナスターシアはアーネストより少し低いくらいの長身。

その分なるほど乳房の膨らみはなだらかに見えるが、実際に触れるとそうでもない。

（ふっくら柔らかいし、それにこの腰からお尻への流れるような曲線……いつまでも触っていたいくらいだ）

「ゆ、勇者。その……服は、脱がなくてもいいのか？ 魔法使いたちとする時は、みな裸になっっていたようだが」

「あの、いったいどこまで覗き見してたんですか。あっ、無理しないでいいですよ、わあっ」

胸元のボタンを外すと、魔族の少女はするりとロングドレスから肩を抜いて下着に包まれた上半身をさらけ出す。

インドア派のフロウラともまた違う青白い肌は、幻のように美しく儂げだ。恥ずかしそうに乳房を手で隠す所作も物憂げで愛らしく、くらりとするほど初々しい。

（こんな綺麗な人が本当に魔王なのか。まあ、見た目とのギャップがあるのは僕も同類だけど、うう、ズボンが突っ張って痛い）

「どうした、私の体はどこがおかしいか？ 他の魔族の娘とそう違わないと思うのだが」

「いえ、魔族の女の子の知り合いがいませんし。でも、すごく綺麗ですよ」

何気に言った青年の言葉に、女魔王は白い肌をかあつと火照らせ目を泳がせる。

「ふ、ふんっ、さすがは勇者パーティーならぬ勇者ハーレムの主だな。だがこの魔王が浮ついたセリフで操れると思うなよ。なよっ！」

照れ隠しなのか何なのか、ナスターシアは思いきりよくロングドレスも下着も脱いでしまい、全裸をさらけ出してアーネストに抱きついてくる。

しなやかな女体を抱きとめると、その軽さと華奢さに驚かされると共に、熱を帯びた少女の火照りを少しでも癒やしてやりたいと素直に思う。まあ、その過程で股間で大変なことになっている例のあれもついでにすつきりさせてもらえれば、それに越したことはない。

「こら、貴様も脱がないか、公平性を欠くぞ勇者」

「え、あ、はい」

自分で言うのもなんだが、アーネストのイチモツは平均に比べてもかなり大きめサイズだと思っている。そのイチモツがかつてないほど固く大きく膨張し、ズボンを下ろすと同時に下腹にぶつかるほどいきり立って飛び出してくる。

しかし、それを見たナスターシアは意外と動揺の色を見せなかった。

「ふん、イチモツの大きさだけなら、ドラゴンや高位魔族にも巨根の持ち主はおるわ。下等なトカゲはともかく、魔族の牡どもはどいつもこいつも己の持ち物の大きさを誇り、それをもってどれほど多くの女の性を壊したかを自慢するくらいだ」

吐き捨てるような女魔王の言葉に、アーネストは少なからず慄然とする。

「そ、そんなひどい」

「魔族の掟は力による征服、支配。それは男女の関係においてもそうだ。男はマラを用いて女を屈伏させ、征服し、支配し、そして破壊する。人間も同じだろう。あの女たちはすでにお前に心酔しておるのではないか」

「そ、そうかなあ……でも、僕は女の人が嫌がるようなことはしたくないですよ」

「あっ？」

不意に腕を掴まれて抱き寄せられ、ナスターシアはアーネストの腕の中にすぼりと収まってしまう。

「人間の男にもひどいやつはいるかもしれないけど、少なくとも僕はいま、ナスターシアさんを気持ちよくさせてあげたいです。ほら、ここもこんなになってる」

「んひっ？　しょ、しょなどと触るにやあっ」

アーネストは左腕で魔王の肢体を抱えるように支え、右手をすらりとした太ももの奥に



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一ーヒロイン&ヒロイン満載!!!



二次元 DREAM MAGAZINE



KTCGでは闘いヒロイン満載ロー...



COMIC UNREAL

メガミ クラシス

詳しくはKTCGの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。